南半球便り（その 99）：インディアン・パシフィック・レール

1 月 4 日

2 年前の豪州赴任当時、在任中にしておきたいと心の中で念じていたことが幾つかあります。その一つが、有名なインディアン・パシフィック・レール（鉄道）で豪州大陸を横断すること。コロナ禍で延期になっていたものの、漸く昨年末に実現したのです。興奮覚めやらぬうちに、ご報告します。

銀色に輝く車体に、堂々たるロゴ。
雄々しいシンボルは豪州最大の猛禽類、オナガイヌワシ（Wedge-Tail Eagle）

１．「天の川が降ってくる。」

1980 年代前半に駐豪州大使を務めていた大先輩で柳谷謙介という有名な外交官がいます。その後、外務次官を務め、外務省ではレジェンドのような方です。私が入省一年生の時、ひょんな展開で、羽田空港に向かう柳谷次官（当時）の公用車の助手席に乗り合わせる千載一遇の機会があり、懐の深いお人柄に接しました。今も大事な思い出です。

その 36 年後の豪州赴任直前、共通の知人による紹介で、今は亡き柳谷大使のご子息と軽井沢でお会いすることができたのです。その時、私と同年代のご子息にこう言われました。「インディアン・パシフィック・レールはお薦めです。あんなに天の川が間近に見えた経験は二度と無いですから。星が降ってくるんですよ。」

この言葉を聞いた途端、私の心は決まりました。絶対に乗る、と。

２．壮大なスケール

連邦制の豪州では鉄道の軌間さえ各州で異なり、太平洋岸のシドニーからインド洋岸のパースに鉄道で赴くためには、最低 5 回は客車を乗り換えなければならないとされていました。漸く 1970 年になって、乗り換えをせずに一気通貫で大陸横断をできるようになったそうです。

インディアン・パシフィック・レールがつなぐ距離は、なんと 4352 キロ。今回の大陸横断に従事したのは、鉄道車両 37 両、乗客 225 名、乗組員 30 名に及ぶ大コンボイ。まさに人間集団の大移動でした。ちなみに、一車両あたりの使用可能水量は 3000 リットルの由。道理で、シャワーの水圧も十分に強かった訳です。

時速は平均 85 キロ、最速でも 115 キロ。後述のように、要所で停車しサイド・ツアーが組まれており、全行程を 3 泊 4 日という比較的ゆったりした旅程で駆け抜けるプログラムです。

行程全図。まさに豪州を“横断”していることがお分かりいただけると思います
（インディアン・パシフィック・レール公式 HP より）

３．心配だったこと

実は、家人にさえ言えずに密かに悩んでいたことがあります。狭小なスペースへの心配です。別に深窓の貴公子として育てられたわけではないのですが、「ウサギ追いし、かの山」ならぬ、広々とした多摩丘陵で育ったせいか、狭苦しいスペースがとことん苦手なのです（笑）。ですので、例えば潜水艦搭乗などは、たとえ、日本が誇るそうりゅう型であろうが、絶対に無理。今回の列車旅行も、3 泊という長さに鑑み、背伸びして最上級のプラチナ・クラス、したがって、一番スペースの広いクラスを選んでみました。

お陰様で、自室にトイレ、シャワー付きの贅沢な間取り。それ以外の客室部分だけで 3 畳分くらいはあったでしょうか。昼間は列車の座席に転換。夜は係員がベッドメーキングをしてくれて、シングルベッドが二つ設置される、なかなか優れもののレイアウトでした。

客室の風景。配慮の行き届いた設備と感じました。
右上は、担当係員との記念撮影。

窓が開かず、新鮮な外気を吸えなかったのはプレッシャーでしたが、スペースの広い食堂車の存在と日毎のサイド・ツアーに救われて、何とかやりおおせました。プラチナ・クラスは僅か 20 名のみ。食事のたびに食堂車で顔を合わせるため、自然に会話が弾むようになりました。リタイアされた方が多く、我々が一番の年少者であった印象です。

４．睡眠・食事

「寝られたか？」ですか。うーん、それは静かな寝室で休むのとは全然違います。時速 100 キロ程度とはいえ、かなり揺れますし、レールや客車が軋む音は常時つきもの。パースに到着し、定宿のホテルにチェックインした時、その静謐に安堵しました。でも、3 泊であれば十分に満喫できるように思いました。

嬉しい発見は、食堂車の食事の充実ぶり！毎食ごとにメニューが代わり、豪州ワインは飲み放題。食事の量・質、サービス、いずれも満足できるレベルでした。豪州独特のカンガルー肉に加え、ラクダ肉のカレーライスに舌鼓を打ちました。

５．車窓風景

これまでパースへは、2 年間の在勤中に既に 4 回、足を運んできました。至近は昨年 10 月の岸田総理の豪州訪問時。ただ、いつも飛行機での出張だったので、今回はパースに赴く途中の景色の変化にひときわ高い関心を持っていました。

というのも、若い頃の米国留学中、3 回にわたって車で大陸横断をした経験があります。米国の地形、景色、風土、さらには歴史や人心についての理解を深める絶好の機会になったからです。

上：食堂車からの車窓風景

右：美しい夕日と鉄道

ニュー・サウス・ウェールズ州、ビクトリア州、南オーストラリア州、西オーストラリア州の４州をカバーし、シドニー、アデレード、パースという豪州の主要３都市をつなぐインディア・パシフィック・レール。豪州を知る上でこれ以上の生きた学びはない、と実感しました。

６．サイド・トリップ

この鉄道旅行の心憎いのは、所々でサイド・ツアーが組まれていることです。例えば、アデレードに着くと、乗客の希望に応じて、バロッサ・バレーやマクラーレン・ベールのワイナリーをバスで訪問し、そこで地元ワインを嗜みつつ夕食を楽しむようなプログラムが一例です。

3 泊目の最後の夜は、西オーストラリア州のアウトバック（荒野）にあるローリンナ駅で、星空を見上げながらの屋外夕食会。信州の凍てつく冬の満天の星の輝きを見慣れてきた私でさえ、「おお」と感嘆の声を上げました。それほど、木星、火星、オリオン座、そして名にし負う南十字星などが、「我、ここにあり」と競わんばかりに煌々と光を放っているのです。

柳谷大使ご子息のお薦めを思い出し、「本当に来て良かった。」と家人と二人深く頷き合いました。残念なことに、私のスマホと撮影技術では、あの夜空のきらめきを画像に収めることは到底できませんでした。ということで、百聞は一見にしかず。いらしてください、豪州鉄道の旅へ。

屋外夕食会の様子。今はイメージで補っていただき（笑）、
是非ご自身の目で、降り注がんばかりの星空を見にいらしてください！

７．総括

ある米国の旅行作家が豪州の荒野を体験し、「怖いほどの空虚（intimidating emptiness)」と評したことがあります。今回、鉄道の車窓から、ひとっ子一人どころかカンガルー一匹さえ何百キロにわたっても見当たらない風景に触れるにつれ、確かに「ここに一人とり残されたらどうなるのだろう。」という、富士山の樹海に似た恐怖を感じました。何せ、携帯電話もメールも、「圏外」でつながりさえしません。広大な大自然を前にして無力な人間を象徴するかのようでした。

同時に、地平線一杯に広がる土漠にさえ、いくつもの緑が点在する有様を見るにつけ、水と生物の存在を感じたことも事実です。また、無限に広がるかのような赤土の大地を目の当たりにし、その下に存在する石炭、鉄鉱石、ガス、そしてレア・アースに思いを致しました。これらが豪州に莫大な利益をもたらし、さらには日本企業の経済活動と日本人の日常生活を支えてきていることを思うと、「ラッキー・カントリー」という月並みな一言では言い尽くせない、天の配剤と豊穣の大地の有り難みを実感するのです。

見渡す限りの豪州の荒野。皆さんはこの風景に何を感じるでしょうか？

あの星達のまばゆいまでの煌めきと共に、いつまでも忘れ得ない大陸横断の旅となりました。

山上信吾